

## 「ドストエフスキイ研究会便り（14）」

## 新型コロナウイルスとドストエフスキイ

— 確かな「言葉」を求めて —

芦川 進一

## 目次

[ページ]

- |                             |   |
|-----------------------------|---|
| 1. はじめに                     | 1 |
| 2. ラスコリーニコフが見た「疫病」の夢        | 2 |
| 3. 樫本大進氏の「コロナ・メッセージ」        | 3 |
| 4. コロナ禍と「裁き」                | 5 |
| ※ 次回「ドストエフスキイ研究会便り（15）」について | 8 |

## 1. はじめに

この春の新型コロナウイルスの登場は、環境破壊問題と共に、人類の生存に対する自然界からの「拒否反応」、或いは「最終警告」として受け止められるべきものでしょう。だからと言って、危機感に捕らわれ過ぎて無闇に悲観的になったり、ヒステリックに騒ぎ立てたりすることでこの問題が解決するとは思えません。性急な行動の前にまず地に足を着け、冷静に思索を重ねて確かな認識と言葉を求めない限り、ただの危機感から発されるだけの言葉はいつの間にか単なる饒舌・空談に変わり、結局は実りの無い日常性の内に頹落して終わるのが常です。マス・メディアで日々目撃される現象です。

私は「ドストエフスキイ研究会便り」に於いて、通常は「論考」の形で自分の仕事の報告をしてきました。今日はコロナ禍について、これは実に厄介で困難な問題ですが、出来るだけ普段皆さんに語り掛けるような調子で文章を記したいと思います。心を揺り動かされる衝撃的な出来事に面しても冷静さを失うことなく、まずはドストエフスキイに向かい、彼の思索を手掛かりに自分自身の頭で考え、明晰な認識と平明な言葉を見出すこと、このことが彼の残してくれた仕事に対して応えるべき道だと信じるからです。

「ドストエフスキイ研究会便り」は13回目のUPで一つの区切りを迎え、その後私は様々なプランを立てつつ、再開に向けての執筆<sup>デッサン</sup>を続けてきました。コロナ禍についてのこの「便り」を、新たな掲載を始める契機にしたいと思います。皆さんが、「ドストエフスキイ研究会便り」を一つの「叩き台」として、自分自身の思索を進めてくれることを、また新型コロナウイルス禍ばかりか様々な危機が迫る現代世界に於いて、人間と世界と歴史について自分自身の確かな言葉を見出し、自らの「生」を力強く切り拓いて行ってくれることを心から願っています。

## 2. ラスコリーニコフが見た「疫病」の夢

この一月、新型コロナ・ウイルスのことを知り、即座に私の頭に浮かんだのはドストエフスキイの『罪と罰』（1867）であり、主人公ラスコリーニコフがシベリアで見た「疫病」の夢のことでした。

この作品の最終章、シベリアに流された殺人犯ラスコリーニコフは、犯した罪の重さに苦しめられつつも、なお魂の底に解き切れぬものを蠢かせ続けていました。やがて『カラマーゾフの兄弟』（1880）に於いて、自らを「神」とし、スメルジャコフと共に父親殺害を図るのは次男のイワンですが、その遠い「先駆者」たるラスコリーニコフは、「ナポレオンたち」の恣意と暴力が支配する人間世界とその不条理を前に、自分は「ナポレオンか？ 虱か？」との問いに憑かれ、遂には斧を手に取り、金貸しの老婆とその妹を殺害してしまいます。この青年は「一線の踏み越え」をして初めて、自分が「ナポレオン」どころか「虱」でしかないことを悟るのですが、流した血の復讐に脅かされつつも、また懲役囚として僻遠の地に流されても、未だなお内なる「倨傲の精神」を根絶させることが出来なかったのです。

このラスコリーニコフに一つの夢が訪れます。アジアの奥地に発した「疫病」が瞬く間に全世界に広がり、この疫病に感染した人間は誰もが皆「強烈な自信」に取り憑かれ、「自分は賢く、自分の信念は正しい」と思い込んでしまいます。つまり誰もが皆、自分を「ナポレオン」としてしまうのです。あらゆる村、あらゆる都市、あらゆる民族に疫病が広まり、あらゆる人間が「狂人」となってゆきます。その果てに全世界が相互殺戮の場となり、遂には数人を除き全人類が滅亡の運命を辿ったのでした。新たな世界を創るべきその数人とは誰であり、また彼らが何処にいるのか、知る人は誰もいませんでした。

この懼るべき夢によって魂を根底から震撼させられたラスコリーニコフは、いよいよ内なる傲慢の根を完膚無き迄に抜き去られます。涙と共にソーニャの足元に跪いた青年は、密かに枕の下に隠してあった新約聖書を取り出し、作品は終わります。

かくしてこの春私は、新型コロナ・ウイルスに導かれ、長い間取り組んでいた『カラマーゾフの兄弟』から、再び『罪と罰』の世界へと立ち帰り、久しぶりにラスコリーニコフの「ナポレオン思想」と「疫病の夢」に向き合い直すことになりました。このことは図らずしも、ドストエフスキイ文学の基本的な問題軸と全体図、そしてその使信について、改めて考え直す機会となったのでした。（コロナ騒ぎと並行して展開する、日本と世界の政治の言語同断な貧困と愚鈍さについては、また別の機会に記さなければなりません）。

さて周知の如く、1862年、「齢四十にして」初めてパリとロンドンを訪れたドストエフスキイは、ここで西欧近代が陥った「病」をハッキリと目撃し、その魂に刻み込んだのでした。『夏象冬記』（1863）の旅です。ここで異教神「バアル」、あるいは「小銭の神」（マモン）として捉えられた西欧近代の病は、帰国後の創作活動に於いて、まずは『地下生

活者の手記』（1864）の主人公が見据える敵、つまりは西欧世界が奉ずる「合理主義精神」として登場し、次には『罪と罰』の全編を貫くテーマとなり、上述のように、その最終章では、ラスコーリニコフが見る終末論的な夢の「疫病」として姿を現わします。人間が自らを地上世界の「主」だとする「倨傲の精神」が、一切を滅ぼす疫病として象徴化されるのです。更にこの疫病は、その後の主要作品の主人公たちの魂に潜み続け、彼らの悪魔的悲劇的運命を司ることで、人類が辿る運命を予言することになるでしょう。

突如世界に登場した新型コロナ・ウイルスは、人間と世界と歴史に関して、そしてそれらが宿す「病」について、ドストエフスキイ文学がその根底に持つ黙示録的・終末論的認識と展望を、我々の眼前に新たに鮮明かつ象徴的な形で浮かび上がらせたと言えるでしょう。

「病」を見つめるドストエフスキイの眼は厳しく、決して楽観的なものではありません。

しかしドストエフスキイ文学と向き合う際、我々が見落としてならないことは、究極この作家が求め描こうと試みたのは、「病」に対する根本的な「癒し」の可能性、言い換えれば「闇」の底から輝き出る「光」であったという事実です。このことは『地下生活者の手記』に於いて、主人公の孤独と不幸を知り、その住まいの扉を叩く売春婦リーザや、殺人者ラスコーリニコフに「ラザロの復活」（ヨハネ十一 1-44）を読み聞かせるソーニャから始まり、遺作『カラマーゾフの兄弟』のゾシマ長老やアリョーシャに至る人間像の内に明らかです。新型コロナ・ウイルスは我々に、ドストエフスキイが生涯を賭して開示してくれた、この「闇と光」「否定と肯定」の両極性、「病と治癒」・「罪と（赦しと）癒し」の弁証法を受け取り、それを胸に刻み込んで立ち上がることを迫っている—— 私にはこのように思われます。

### 3. 榎本大進氏の「コロナ・メッセージ」

次に、このコロナ禍で私が行き当たった一つのエピソードを記しておきたいと思います。先日NHKの「プロフェッショナル」という番組が、「緊急企画 危機と戦うプロたち」というタイトルで、何人かの「プロたち」のコロナ・メッセージを伝えていました。その中で榎本大進氏が語った言葉を、私なりに要約してみます。榎本氏は、三十代でベルリン・フィルのコンサート・マスターに就いた著名なヴァイオリニストです。

「今まで自分はヴァイオリンが大好きで、ひたすらこの一筋に生きてきた」

「自分は人々から必要とされていると信じ、またそう願って励んできた」

「しかしこのコロナ騒ぎで考えさせられるに至った。自分など必要とはされていないのではないかと」

「これからは、人々が必要としてくれると本当に感じられる自分を創りたい」

榎本大進氏の言葉は、コロナ禍の混乱の中にあつたためでしょう、決して理路整然としたものではなく、たどたどしいものでした。しかし一所懸命に語る彼の言葉は、この三 - 四カ月、ウイルスの危機さえ商品化してしまい、それを消費し尽くそうとするマス・メディアの空虚で饒舌な「言葉・言葉・言葉」の氾濫の中で、私が出会った数少ない真実の籠った言葉でした。

マス・メディアが日々垂れ流す言葉を、ここに幾つか挙げておきます。

「新型コロナ・ウイルス禍は、この百年で人類が体験した最大の危機である」

「我々の生は今や、前代未聞のフェイズに入った」

「死は‘コロナによる死’ばかりではない。‘経済による死’もあるのだ」

「我々は空前絶後の、世界最大のコロナ対策をした」

本当に新型コロナ・ウイルス禍は、この百年、人類が招いた幾多の戦争や大虐殺よりも危機的なものなののでしょうか？ 人類が迎えた「前代未聞のフェイズ」とは、一体何のことでしょうか？ 我々人間の「死」とは、本当に「コロナによる死」と「経済による死」の二つしかないのでしょうか？ 「空前絶後の」とか「世界最大の」という修飾語が持つ空虚さと滑稽さを、発話者は自覚していないのでしょうか？

新型コロナ・ウイルスの危機を表現するにあたって「ロック・ダウン」「ステイ・ホーム」「アラート」「ロード・マップ」等々、私にはキザでコケ脅かしの外国語にしか響きません。日常に溢れるのは、ただ徒に人々の耳目を集めようとする「言葉・言葉・言葉」の安売りでしかなく、これらの言葉が指し示すものとは、虚ろな精神以外の何物でもないように思われます。

ここで一つ、ルカ伝が記すイエスの言葉を見ておきましょう。

「<sup>なんぢ</sup>ら何<sup>なに</sup>を眺<sup>なが</sup>めんとて野<sup>の</sup>に出<sup>い</sup>でし、<sup>かぜ</sup>風にそよぐ<sup>あし</sup>鞆なるか？」（ルカ七 24）

お前は一体、何をしようとしてこの世に生まれてきたのか？—— 一挙に人間存在の核心に切り込み、ギリギリの応答を迫る問いです。（この言葉が発せられた具体的な状況について、ここで説明することは省きます）。二十代初めにこの言葉と出会った時、私は胡麻化して逃げることが出来ない問いを突き付けられたと感じました。私ばかりではありません。当時は若者たちの多くが、それぞれの道で、胸を<sup>えぐ</sup>抉るような言葉を見つけよう、自らの存在の意味を見出そうと模索を続ける時代でした。しかしその後「所得倍増」の掛け声の下に、経済の高度成長期からバブル期にかけて、ほぼ完全に「小市民化」を果たした我々日本人の魂の内には、最早このような言葉・問いを容れる場所はなくなってしまったように思われます。明治維新からわずか十年、福沢諭吉は日本国民の魂が早くも「休息」してしまっ

た現実を見出し、愕然とするのですが(『文明論之概略』第四章)、機会さえあれば直ちに「安きにつく」のが、我々の肉体であり魂の現実なのでしょう。そしてこの現実こそ、『夏象冬記』の旅に於いてドストエフスキイがパリとロンドンで目撃した現実<sup>に</sup>他ならず、その後彼の創作活動一切は、この現実を向こうに置き、主人公たちを上<sup>の</sup>イエスの問いに正面から答えさせようとする試みだったと言えるでしょう。近代以降の人間の「世俗化」と「小市民化」という現実を厳しく見つめ、「幾世紀にもわたる精神的抵抗と拒否」を覚悟し、それと生涯妥協なく戦い続けたのがドストエフスキイだったのです。

ここで再び榎本氏に戻りましょう。「榎本大進」と言えば知る人ぞ知る、既にクラシック音楽の世界で不動の地位と名声を確立した人物です。熱烈なファンや音楽関係者やベルリン・フィルの構成員を始めとして、彼を評価し拍手と声援を送る人々は少なくありません。しかし彼はこのコロナ禍を、自分が積み上げてきた、そしてまた多くの人たちが支えてくれる生が一挙に取り上げられ、「無」とされる懼るべき試練の時だとして謙虚に受け止め、これと正面から向き合おうと決意したのです。上に記したように、このことを表明する榎本氏の言葉は少なからず、たどたどしいものでした。しかし私はこの時、そのたどたどしさ自体が、榎本氏がその内に脈打たせている人間としての豊かな感性<sup>あかし</sup>を証するものであり、また平凡な日常性への頹落を拒み、常に高きを求める芸術家としての天稟を証するものとして、深い感銘を与えられたのでした。

#### 4. コロナ禍と「裁き」

「はじめに」で私は、新型コロナ・ウイルスの登場は、人類の生存に対する自然界からの「拒否反応」、或いは「最終警告」として受け止められるべきことを記しました。続いてドストエフスキイと榎本大進氏を取り上げ、このコロナ禍がもたらした危機の意味について考えたのですが、最後にこの問題を「裁き」の視野の内に捉えておこうと思います。

「裁き」の概念は、古来日本では仏教の「末法思想」殊に「地獄」の教えと結びつき、強く人々の心をつらえてきました。ところが現代では「嘘を吐くと閻魔様に舌を抜かれるぞ!」と脅されても、殆どの子供たちは何の反応もしなくなってしまうました。「裁き」が「懼れ」と共に脈々と息づく世界、人間の運命が「裁き」によって、天国に向かってであれ地獄に向かってであれ、決定的に方向づけられる世界、それがドストエフスキイの世界です。この作家が描き出すドラマの世界に入り込み、また彼が「命」とするイエスに目を向け、二人に導かれて人間と世界とその歴史について考えようとする時、我々はそこに根本的な「思考の基準<sup>フレーム・オブ・レファレンス</sup>枠」として「裁き」の概念が存在し、それに伴う「懼れ」の感覚が脈打つことに気づかされるでしょう。このことを理解しない限り、彼ら二人が提示する問題の多くは、現代の「嘘を吐くと閻魔様」と同じく、<sup>リアリティ</sup>実感<sup>を伴わない</sup>単なる言葉と概念

の羅列でしかなくなってしまうでしょう。言い換えれば、我々人間は本来「裁き」の前にある存在だと自覚して初めて、人間と世界とその歴史の問題も、今回の新型コロナ・ウイルスの問題もまた、その深い意味を浮き彫りにすると考えられるのです。困難で厄介な問題ですが、更にここに焦点を絞っておきたいと思います。

周知の如く、ドストエフスキイの作品に犯罪が描かれないことはまずありません。しかしそもそもこの作家は「一線の踏み越え」をした犯罪者たちを、何と向き合わせようとしているのでしょうか？——我々はこの問いに対する答を、既にラスコーリニコフに於いて見てあるのですが、ドストエフスキイはこのことを遺作『カラマーゾフの兄弟』のゾシマ長老をして、更に一層明快かつ端的に表現させています。つまりゾシマは、罪人の良心に臨むのは神の裁きであるとし、これを「悪業への懲罰」或いは「キリストの律法」とも呼ぶのです。このゾシマ長老を描く時、それと明言はしませんが、ドストエフスキイが心に置いていた原像は福音書のイエスであり、殊にルカが伝えるイエスの次のような言葉だったと考えてまず間違いはないでしょう。

「我が友たる汝らに告ぐ、身を殺して後に何をも為し得ぬ者どもを懼るな。  
 懼るべきものを汝らに示さん、殺したる後ゲヘナに投げ入るる権威ある者を懼れよ。われ汝らに告ぐ、げに之を懼れよ」 (ルカ十二 4-5)

『罪と罰』論でも記したのですが(2006)、私は「ナポレオン思想」に取り憑かれた青年ラスコーリニコフが、ひとたび血の一線を踏み越えるや投げ込まれた地獄を、これほどの的確に表現した言葉はないと思います。ラスコーリニコフばかりではありません。ドストエフスキイの作品に於いては「一線の踏み越え」をした人間は、「犯罪者」として法的な「裁き」・「裁判」に付されるばかりか、「罪人」として「ゲヘナ」に投げ入れられ、「悪業への懲罰」(神の「裁き」・「審判」)に曝され、遂には旧き自己とその「罪」を根絶させられるのです。

社会を律する「法律」の侵犯者である「犯罪者」と、神の定めた「律法」の侵犯者である「罪人」。犯罪者に対する「裁判」と、罪人に対する「審判」——ドストエフスキイの描く「罪」と「裁き」とは、このように「地上」と「天上」という、互いに相反する二つの世界にわたる二重性を持つことに注意すべきです。ともすると我々はこれら両世界を混同してしまい、むしろ前者だけしか問題としません。ドストエフスキイによれば、この「罪」と「裁き」の二重性が最早明確に区別されなくなった時代が近代であり、その曖昧となった境界線上を、専ら地上性に目と心を釘づけにされて生きるのが我々なのです。

「罪」と「裁き」の二重性。ドストエフスキイはゾシマ長老に、「悪業への懲罰」を「キリストの律法」とも呼ばせていることから分かるように、ドストエフスキイ世界に於いて真に「懼るべきもの」とは、一線の踏み越えをした人間を「ゲヘナに投げ入るる権威

ある者」、つまり神とイエス・キリストによる「裁き」・「審判」に他なりません。ラスコーニコフは、殺人の末のシベリア流刑という形で、人間社会から遥か遠く引き離されて初めて、自分が「ナポレオン」どころか「虱」でしかないこと、人間存在が本来懼るべき「裁き」の場に置かれていることに気づかされたのでした。そして榎本大進氏の場合も、コロナ禍によってコンサートの場を奪われて初めて、自分がベルリン・フィルのコンサート・マスターどころか、敢えて言えば「無」でしかないことを悟らされたのであり、基本的には彼もまたラスコーニコフと同じく、人間を「ゲヘナに投げ入るる権威ある者」のリアリティに触れたのだと言えるでしょう。

二人にこの痛切な覚醒を促したものが、偶然にも共に「疫病」であったことは実に象徴的です。普通我々は「疫病」が究極人を脅かすのは「死」を以ってだと考えます。しかし我々が最早逃げ場のない恐怖と絶望の内に追い込まれるのは、実は「死」よりも更にその奥にある「懼るべきもの」によってではないでしょうか？ つまり自分が絶対の「無」を以って臨む「裁き」の場に置かれていること、「ゲヘナに投げ入るる権威ある者」の前に立たされていること、この事実気づかされることによってなのでしょう。ところが今や我々は、自分の肉体ばかりか精神さえもが「無」とされるという死の二重性や、「ゲヘナに投げ入るる権威ある者」の存在——これらによって表わされる「裁き」と「懼れ」のリアリティを感受し察知するには、余りにも鈍くなってしまったのです。

これは何処に起因する鈍さなのか？ またこの鈍さに対して、如何なる「治癒・癒し」の可能性があるのか？ そもそも「無」を以て臨む「裁き」とは何なのか？ 「ゲヘナに投げ入るる権威ある者」のリアリティとは何なのか？——これらの問題に対して自分自身の答えを出すべく頹落した日常性を捨て去り、広く人間と世界とその歴史に目を向けて感性と知性を研ぎ澄ませ、確かな「生」を打ち立てる努力を開始すべきは今であることを、新型コロナ・ウイルスは我々に迫っているのだと考えるべきでしょう。

「懼るべきもの」とその「裁き」について、十分な論証と展開のない舌足らずな文章になってしまいましたが、コロナ禍で世界中が騒然としている今、この「便り」を皆さんがドストエフスキイに目を向け、自ら思索をし、確かな言葉を求める上での参考として頂けるならば幸いです。

(了)

(2020年5月末)

## 次回「ドストエフスキイ研究会便り(15)」について

今回は、昨年2019年の春「東京YMCA午餐会」での小講演「ドストエフスキイと福沢諭吉、二つの旅」を原稿化して掲載する予定です。1862年（文久2年）、ドストエフスキイと福沢諭吉は、図らずもほぼ同じ西欧諸国を旅します。これら二人の旅はその後、彼らの人生にとっても、また彼らの祖国にとっても、運命的な意味を持つことになったのです。

この旅の記録が、ドストエフスキイの場合は『夏象冬記』、福沢の場合は『西航記』です。これら二つを参照しつつ、二人が目撃するに至った西欧近代の「病」について確認をし、その「病」に対して二人がどのような対処法・治療策を見出そうとしたかを検討してゆきます。

この作業、殊に『夏象冬記』の検討は、今回の新型コロナ・ウイルスについての考察と重なり、またドストエフスキイと福沢の思想の核心を知る手掛かりとなるでしょう。